

大麻使用は社会・人にとって「害」なのか

本間 直史

本論文は、日本における大麻使用とその規制のあり方について、単純な善悪や合法・違法の二元論ではなく、国際的な動向や規制の歴史・背景を踏まえながら、日本における大麻使用のあり方について検討する。日本では違法薬物に対する厳格な規制が続く一方、若者や著名人を中心に大麻使用が増加しており、その背景にはストレスや社会的孤立など多様な要因が存在する。加えて、諸外国ではウルグアイやカナダ、タイなどで大麻合法化や非刑罰化が進む一方、日本では 2024 年に大麻使用罪が新設され、規制強化の方向が取られている。

第 1 章では、大麻の定義・成分・歴史・身体精神への影響を整理し、THC の精神作用と CBD の医療的有効性を比較しながら、大麻が一面的に評価できない存在であることを示す。第 2 章では、日本の大麻規制の法的構造と改正の経緯を分析し、医療用大麻解禁と使用罪新設の政策の意図を明らかにする。第 3 章では、日本社会における若年層、著名人の使用実態や世論を検討し、刑罰がもたらす社会的影響について言及する。第 4 章では海外の合法化事例を比較し、文化・歴史・政治の違いが政策に影響していることを示す。また、全国住民調査の統計データを用いて、日本における大麻使用率の実態と近年の増加傾向を示し、新型コロナウイルスによる社会不安や生活環境の変化が薬物使用に影響を与えた可能性について言及する。さらに、逮捕や報道によって生じる「デジタル・タトゥー」など、刑事処罰が使用者の社会復帰に与える影響にも着目し、処罰中心の政策が必ずしも問題解決につながらない点を論じる。最終章では、個人の自由と社会的リスクについて、タバコやアルコールとの比較を行い、日本におけるより適切な大麻規制の在り方について提示した。